

# 『水夫ビリー・バッド（秘話）』における バラと鳥と水夫

大 島 由 起 子\*

## 序

Herman Melville (1819-91) の遺稿 *Billy Budd, Sailor (An Inside Narrative)* (1924, 以下 *BB* と略記) については、登場人物 Billy Budd が救済されたか否か、作者メルヴィルが神を受容したか否かなどを巡って、解釈が分かれてきた<sup>1</sup>。本稿ではこれらに答を出すべく、ビリー処刑と、続く最終 5 章を辿り直し、傍証として *BB* と関連すると思しい伝記的事と幾篇かの晩年の詩作品を検討したい。結論を先に申せば、ビリーは処刑されてキリストや預言者 Elijah よろしく昇天し、バラ油と化したと読める。また *BB* の最終 4 章は公式記録の信憑性のなさを示すことで〈歴史〉を転覆し、さらには水夫のなかで永生を得るビリーを描くことで公を格下げしていると読める。

## 1. 秘儀—“took the full rose” ということ

絞首されるビリーは、軍艦の全員が見上げる中、キリストのごとく暁の空に昇ったと描写される。この昇天について批評家 Gordon Teskey は、*BB* の一人称の語り手による聖書類用に注目して、聖書についての博識を縦横に用いて論じた。テスキーは、ビリー処刑時に空はしばし美しく染まりはしたが、その薄

---

\* 福岡大学人文学部教授  
本研究は科研費 (22320058) の助成を受けたものである。

紅色も暫くすると掻き消えてしまい、静止空間のなか船の横揺れに伴ってビリーの遺骸だけが動き、その動きが“decisively canceling the possibility of apotheosis which had been briefly raised” (Teskey 387) であると主張した。処刑を扱った第 25 章は、船の横揺れが、水夫（や読者）に犯罪人として縊られたビリーが帆桁で揺れているだけだという非情な現実を突きつけて閉じられるというのである。つまり、せっかくの超越の可能性も物質的現実否定されるだけだということを、ビリーの昇天という垂直運動と船の横揺れという水平運動とで対比させている。テスキーは、作品では処刑時に放たれる光芒は黙示録の光であり、ビリーはキリストのごとく昇天するという描写はあるものの、その救済は無効にされるだけであるという (Teskey 391)。

しかし、巧緻なようでいて、テスキーの論には限界がある。すぐさま幾つもの疑問が浮かぶからである。例えば、ビリーの身体など、彼の魂が昇った後の抜け殻にすぎなかったとすれば、いかに。ビリーは普通人ではないことを彼の遺骸の特殊さが雄弁に伝えているのではなかったか。ビリーの魂はテスキーがいうようには桁などで止まらず、バラ油としてさらに昇り、そして天空に受け容れられたなら、いかに。また、BB が公式記録を無効にするほどのビリーの永生を見せつけた後にしか閉じないのは、いかに。作品はビリーの死で閉じられているのではないから、テスキー論の死角の最たるものは、作品最終部を論じてはいない点であろう。しかし、何もテスキーに限ったことではない。ビリー救済の成否を吟味するには、こうした疑問点を念頭に処刑から作品末尾までを辿り直さなくてはならない。

BB 第 25 章から始めたい。本章は上官を毆殺した罪でビリーが処刑される場面で、ビリー昇天までを扱っているが、その冒頭で語り手は、預言者エリヤが弟子 Elisha に自分の徴である毛皮のマントを落として昇天することに言及している。ここでビリーは旧約聖書「列王記下」(Kings 2) 第 2 章 12 節の預言者エリヤに比されている。同船の水夫仲間が処刑時にビリーから何を継承し

たのかを考えると、エリヤはこれから昇天するビリーに、そして弟子は大樫帆桁に吊り上げられるビリーを仰ぎ見る水夫たちに相応し、後継者エリヤにエリヤが落とすマントはビリーから継承された赦しの精神であることまでは分かりやすい。ビリーは澁みなく、心から艦長万歳を叫ぶ。その刹那、ビリーの魂が仲間たちのハートに入り込み、ビリーに合わせる形で皆が自然と「艦長万歳！」を唱和した。BBの語り手は、微用前にビリーが乗っていた商船の人にも、常にさりげなく諍いを取めるビリーを牧師に喩えさせていた(47)<sup>2</sup>。処刑に先駆けてのエリヤへの言及は、ビリーもまたエリヤよろしく永生を得て、後に現世に戻ってくることを仄めかしている。

一方、第27章で描かれるビリーは南海の<蛮人>にも比されてもいる。彼の遺骸はハンモックに包まれ水葬されるが、そのとき南海のような水音を立てたと唐突にも描写され、集った鳥が旋回しついついまでも啼く。第24章で描かれる処刑前夜には戦艦付の牧師がビリーに改宗を勧めるが、ビリーはタヒチ島の原住民が当初、宣教師に対してそうしたように、礼儀正しく傾聴するも静かに改宗を拒むと描かれる<sup>3</sup>。仲間が<異教徒>のまま逝ったビリーにキリストを見るにせよ、語り手がビリーにビリーという人物の姿を借りたキリストとエリヤの顕現を見るにせよ、それはビリーのポリネシア的無垢がキリスト教徒である彼らにはキリスト的だと映っただけのことであろう。作品にはそうした宗教の捻れに拘泥しているふしはない。むしろ戦艦付の牧師は、ビリーこそが広義の天国に召されるべき人物だと確信したからこそ、彼を改宗させる不要さを悟り、異例のことながら、改宗しないビリーの頬に口づけて身を引いたと、肯定的に描かれている。ここでメルヴィルは、タヒチに代表される強引な宣教を転覆させて、「心根がよく分別もある」(121) 従軍牧師に異教徒ビリーを尊重させていると考えるべきである<sup>4</sup>。また、作者がビリーの死にキリスト昇天のイメージを付していることは、キリストは近代化したギリシアの島（西洋文明）ではなく素朴さを残すタヒチにこそ降臨すべきであったと考えるようなメ

ルヴィル独特のキリスト観に起因しよう（杉浦 196-97）。

さて、ビリー昇天場面に戻り、バラを注視したい。作中でビリーは “the rosetan of his cheek” (98) をはじめ、何かにつけて彼の天使のごとき善性が頬のバラ色に表れ出ているとされてきたが<sup>5</sup>、昇天場面もまたバラに包まれている。次のように。

[I]t chanced that the vapory fleece hanging low in the East was shot through with a soft glory as of the fleece of the Lamb of God seen in mystical vision, and simultaneously therewith, watched by the wedged mass of upturned faces, Billy ascended; and, ascending, took the full rose of the dawn.

In the pinioned figure, [Billy] arrived at the yard-end, to the wonder of all no motion was apparent.... (124, emphasis added)

このように、朝未だきに処刑合図が音もなく下った刹那、東方に浮かぶ霞のごとき薄雲を貫き、神秘の幻に現出する神の子羊にも似たバラ色の柔らかな光が差し、ビリーは皆に見守られつつ昇り、昇りつつ “took the full rose of the dawn” した。彼方からの曙光が桁に吊り上げられるビリーにのみ当たり、水夫たちは未だ薄暗い領域にいる。

ここの “Billy ascended; and ascending, took the full rose of the dawn” のバラの意義については等閑視されてきた。僅かな例外として、先に言及した批評家 Robert Milder の論を見ておきたい。ミルダーは同文について、次のように桁に刑縄が絡む様を十字架に絡むバラ蔓に擬して、そこに薔薇十字を見ている。

Billy Budd joins the rose and the cross in the hanging scene when the

“pinioned” Billy ascends and takes “the full rose of the dawn.” (Milder, “Old Man Melville” 98)

Melville envisions a latter-day order of philosophers whose talismanic symbol is the Rose-Vine twined round the Cross. (*Ibid.* 85)

筆者は、それに加えて、本場面にバラ油を重ねて読みたい。(バラ油とは エッセンシャル・オイル 精油 であり、2,000~3,000 ほどの花を蒸留して 1cc 抽出可能である。当時、その抽出は神秘的な精神変容と結びつけられていた<sup>6)</sup>。) ミルダーは、せっかく上記引用部のように薔薇十字を読むことを唱えながらも、ビリー処刑をバラ油抽出と関連づけなかったが、それはミルダーがメルヴィルの晩年詩「バラ栽培農夫」(“The Rose Farmer”)を *WW* 随一の詩だと重視しつつも (*Ibid.* 86)、詩で描かれているバラ油作りは当時よくなされた蒸留手法であるのに、それを生花圧縮だと勘違いしたこと (*Exiled Royals* 223, “Old Man Melville” 96) に起因していよう。メルヴィルは本箇所をユダヤ教の神の顕現を表す “Shekinah” という語を “rose” に差替えてもいるので、ユダヤ・キリスト教の枠を逸脱させようとした意図も察知できる。さらには、後述のように作者の晩年詩も考慮すれば、ビリー昇天がユダヤ・キリスト教的解釈を超える部分を帯びていることが分かりやすくなる。

先の “took the full rose of the dawn” はバラ油的秘儀としても読める。ビリーは朝 4 時に全員集合をかけられた後、絞首された。バラ油抽出では通常、花卉からオイルが蒸発してしまわないように未明に花を摘むが、執筆当時にバラ栽培に勤んでいたメルヴィルであってみれば、暁のバラが最も美しいことを知っており、それもビリー刑死をその時間帯にした一因であろう。“full rose” は一杯の咲き誇った多花卉だけでなくバラ油を、そして試練によってビリーの魂が “full rose” として本質を開くことも暗示し、さらには生前のビリーの邪念に歪んだためしのない風貌の初々しさを表し、ビリーが絞首に通常起る引

きつり（勃起）なしに肉体を脱ぎ捨てて、“vapory fleece”の雲間から差す神の子羊にも似た柔らかな光の中に祝福されながら迎えられる様まで表しているであろう。わざわざ雲が蒸気でできている常識を語る“vapory fleece”は、キリストを表す羊毛のみならずバラ油抽出時の蒸気に読者の注意を喚起させよう。

本解釈は、メルヴィルの詩「バラ栽培農夫」(“The Rose Farmer,” *WW*)で描かれるダマスクローズも八重であるように、バラ油作りには多弁花が使われていたこととも符丁する。処刑時のビリーを表す“pinion”には、ゴルゴタの秘儀を想起させる「手を縛る」という意味の他にも「翼を縛る」意もあり、ビリーを鳥に見立てる一助となる。鳥よろしく陽気に歌い暮していたビリーだから、身体が縛られ縊られても魂は空に舞うのだ。メルヴィルはビリー処刑時にカラフルな光芒を放ちバラを匂い立たせ、天空を薄紅色に染めた後、元の空漠の海(61, 109)を背景としたモノクロの世界に戻す。

*BB*の時代設定は帆船から蒸気船への移行直前であり、輝かしきビリーを懐古する年配の語り手は、記憶の果ての彼方なる現代ほど散文的でなかった帆船時代を顧みる。作中でビリーは一貫して“upright barbarian”(52)や“a barbarian Billy radically was”(120)に比されており、かつ、彼は孤児の出自で野生児Kaspar Hauserに喩えられもするように、他所からぼつねんと文明世界に迷い込んだかのように造型されている。ビリーのような<蛮人>は人を疑うことを知らぬゆえに軍規の支配するような戦艦では生きてゆけぬ、そういう定めのようなものである。そうしたビリーが、一度上官Claggartに叛乱首謀者にされそうになると、身の潔癖を伝えたくても吃音ゆえに毆殺でしか反応できなかったもどかしさというのは、前近代が修辞で容易に近代に滅ぼされていくこと、ひいては強者による歴史を含む公式記録支配の謂いでもあろう。思えば、執筆時のアメリカ合衆国も<蛮人>消滅の節目であった<sup>7</sup>。

晩年詩は近代呪詛も大きな特徴としているが、メルヴィルにはビリーのよう

な前近代の残滓は消えゆくという歴史の不可逆性の認識を深めていたろう<sup>8</sup>。彼は自然界や現実の過酷さを忘れて好々爺と化していたわけではない。そうしたメルヴィルにとっては、上官を殺めたビリーが放免されるなど、安直だとしか映らなかったろう。そうした心理の隘路から編み出したのが、バラと水夫の絆による、純粹無垢を具現する愛しきビリー救済であったと解せる。ビリーを縊りはしても、日常バラを知るメルヴィルはバラ油を介して救済を漂わせ、かつ詩で薔薇十字的な絆を謳うメルヴィルはビリーを仲間の水夫達の絆で擁護したのではなかったろうか。メルヴィルにとってビリーを縊るなど、およそ痛み以外の何物でもなかったはずだが、それでもビリー処刑に踏み切ったとことを見ると、供儀のようにビリーを差し出すことで読者の胸を締め付け、しばしあたりを領する薄紅の曙光を仰ぎ見る水夫と読者の魂に神的とすらいえる美を刻むためということに尽きよう。メルヴィルは推敲に推敲を重ねたという *BB* には芸術家として美の真髓を盛りたかったからこそ、ビリーに肉体を脱ぎ捨てさせて聖なる精油に昇華させたのであろう。そのように読むと、いよいよもってビリー処刑は、静寂の中にスローモーションのごとく審美を表わすメルヴィル芸術の真髓に迫っているといえよう。

## 2. *BB* 最終5章

メルヴィルは *BB* を、ビリー処刑を描いた第25章で完結させてもよかったはずだが、これだけで終わらなかった。

まず第26章では、絞首されたビリーの遺骸には例外的に引きつりがみられなかったことが語られ、戦艦の外科医に、被刑者の意思で勃起を防げるものではないと科学的見解を述べさせている。次の第27章ではビリー水葬の際に鳥がいつまでも旋回する。この2章からはビリーの霊化へのメルヴィルの意思が読みとれる。そして次章第28章では、ヴィア艦長が、ビリーの事件から数年後に戦傷を負い今際にビリーの名を繰り返す。ビリーを忘れていなかったこと

を証すヴィアのうわごとが、ビリーの艦長万歳と響きあう。一転して次章第29章では、事件後に出された週刊の海軍報告で、ビリーを叛乱首謀しようとした外国人のならず者にしており、読者を驚愕、失望させる<sup>9</sup>。ここでBBを閉じていたならばビリーを穢したままであった。

しかしメルヴィルは最終第30章を加えることで今一度逆転させ、今度は水夫の絆で最終的にビリーを救う。公式という名の下の粉飾塗れの海軍報告はずっと以前に人々に忘れられたと語りに言わせる一方、水夫の間で息づくビリーを描くのである。下記引用のように、水夫たちはビリーの表情の清澄さゆえに彼の潔白を信じる。

Ignorant though they [i.e., the bluejackets] were of the secret facts of the tragedy, and not thinking but that penalty was somehow unavoidably inflicted from the naval point of view, for all that, they instinctively felt that Billy was a sort of man as incapable of mutiny as of willful murder. (131)

そうした直感に基づく人物即断は、取りようによっては感覚的との誇りを免れないはずだが、BBはそもそも人の外見は魂の発現であるという価値観を前提とする小説でもある。

水夫の絆といえば、メルヴィルは作品表題を *Billy Budd, Foretopman* から *Billy Budd, Sailor* に改め、ビリーを、檣帆桁辺りを跳び回るいなせな一水夫から、持ち場を特定しない平水夫の一員にしている<sup>10</sup>。同乗仲間は亡きビリーを忘れず、後に様々な船に別れていても連絡を取り合い、数年してビリーが架けられた大檣帆桁が廃材となると知るや桁を手に入れ、その木端を十字架とみなして重宝する。— “The spar from which the foretopman [i.e. Billy] was suspended was for some few years kept trace of by the bluejackets. … To them a chip of it was as a piece of the Cross.” (131) 考えてもみれば、仲間はヴィア

艦長に信用されていなかったゆえにビリーを救えず、物語の悲劇性を深めている。ヴィアは、ビリーによるクラガート殺害後に急遽召集した軍法会議で、ビリーの即時処刑に士官から難色を示されるや叛乱防止策だと強弁した。当の水夫たちは叛乱を起こそうなどという気は毛頭なかったにもかかわらず、ヴィアは“*Why? they will ruminate. You know what sailors are.*” (112) と言い張ったのだった。

BB は平水夫が唄い継ぐバラッドで閉じられるが、そもそも BB は本バラッドを膨らませてできた作品であった。まずは同じ持ち場にいた詩心のある平水夫が数行を作ってビリーになり代ったつもりで歌い始め、いつしか平水夫集団が合作としてゆき、反復句もない稚拙なものながら活字にもした。平水夫仲間にしてみれば、唄に登場する等身大の水夫も神格化した水夫も、いずれ変わらぬビリーなのである。唄のビリーは、処刑前夜ながら健やかで食欲もあり、まず戦艦付き牧師に感謝し、友に処刑前に手を握ってくれるよう頼み、女性を回想し、独り水底に沈むことに思い至る。日頃、陽気に歌い、自作も口ずさんでいたビリーだったから、首に縄を掛けられた時も、「まさに小枝から飛び立とうという鳥」のように長く「鳴き鳥のように澄んだ旋律」で艦長万歳とひと啼きして、瞬時に仲間のハートに入り込んだのだ。— “*…syllables too delivered in the clear melody of a singing bird on the point of launching from the twig— had a phenomenal effect….*” (123) なお、水夫の絆ということでは、周知のように、メルヴィルは BB を自分が戦艦に乗っていた時の上官チェイスに献げている<sup>11</sup>。作品の献辞 “*Wherever that great heart may now be/ Here on Earth of harbored in Paradise*” (42) も、バラッドの題目 “*Billy in the Darbies*” も、水夫のイディオムである。

このように、BB 末尾では下層階級に属する平水夫によって桁は重宝され、バラッドは唄い継がれる。語り手そしてメルヴィルは、ビリーのようなく蛮人>の無垢は公式には貶められようとも私的には忘却させぬとばかりに、元平水夫

の心意気を見せたのであろう。メルヴィルが時代の流れに消え行く無垢を残そうとしたとみなせば、一見まとまりに欠ける最終5章にも、方向性を炙り出せる。次の2節ではBBを離れ、ビリー救出を、伝記や他作品から傍証したい。

### 3. 老境—ハーバーとバラ

メルヴィルは日当を得るために19年間ニューヨーク税関検査官として働き、遺産が転がり込むとようやく職を辞し、命尽きるまで詩とBB執筆に没頭した。病死までの6年程に2詩集『ジョン・マーたち水夫』(*John Marr and Other Sailors*, 1888, 以下JM)と『ティモレオン、他』(*Timoleon, Etc.*, 1891以下T)を私家出版した。草稿として残していた詩集『雑草と野生植物にバラ、二輪添えて』(*Weeds and Wildings, Chiefly, with a Rose or Two*, 1891, 以下WW)は死の直後に出版された。筆者としては、なぜか副題のないBBにも“*Chiefly, with a Rose or Two*”なる副題を付け加えたい誘惑に駆られる。

ともあれ、BB理解のためには伝記で等閑視されてきた部分も助けとなる。例えば、ニューヨーク市スタテン島のSailors' Snug Harborである<sup>12</sup>。弟Thomas Melvilleが17年間そこでガバナーを勤めており、親族の集いの場でもあった。マンハッタン在住のメルヴィルには便利でもあり、彼は催しに親族ぐるみで参加して泊ることも多かったし、一人でも通い、old Snugたちと存分に水夫言葉で冒険譚に興じ、船唄を唄った。水夫を謳うことも多かったメルヴィル晩年を考えるにあたってこの施設はおよそ無視できない。また、そこが身寄りのない元水夫のための施設で、篤信により人種、国籍、宗教を問わず、元船乗りで窮乏している者であれば無料で暮らせる施設だったとあっては、メルヴィルには自分がかねてより理想としていた博愛的コスモポリタニズムの現出とも映じたい。スナッグハーバーはかくも名に負う心地良い所であったが、かつての海の男同士ということもあって相性が良かった弟に1884年に心臓発作で死なれると、おそらくはトマスの公金流用に対する批判が原因であろうが、メル

ヴィルにしてみればようやく引退した時期であるにもかかわらず出入できなくなった。だがメルヴィルは唄やストーリーテリングで全国に名を馳せていたこのハーバーで気さくな交歓をしたのだから唄の永続力を知っていたはずで、そこでの交流を絶たれると、今度は作品で水夫仲間を懐古したのであろう。JMの表題作“John Marr”では、アメリカ大平原で、海にも芸術にも興味がない開拓民の間で孤立したマーは、かつての水夫仲間である、刺青を彫り耳飾りをした素朴なく蛮人>たちを恋しがらる。

晩年のメルヴィルについてはベシミズムのみが強調されすぎたきらいがあるのではないだろうか。なるほど彼は文壇との交流を避けたし、書簡を見ても、存在していなかったかと思われるほど親族の間で影が薄かった様であるし、相変わらず悲観的な書物も読んでいたが、寡黙かと思いきや、興に乗れば悪戯っぽく饒舌であったようだ。ポリネシアに自分の落とし胤がいると床屋での自慢振りからは（Robertson-Lorant 577-78）<sup>13</sup>、スナッグハーバーでの羽目のはずしぶりを容易に想像できよう。懐かれていた愛孫娘たちには水夫言葉で喋りかけていたともいう。

引退後のメルヴィルは1888年から、マンハッタン在住とあって決して広くはなかったものの自宅裏庭でバラ栽培に勤しみ、花卉を贈物や手紙に添えて愉しんでいた（Robertson-Lorant 571）。バラと書斎とのふたつが大切な場所となっていたというのだから（Dillingham 223）、バラの意味を我々はもっと探ってみてよいはずである。

#### 4. 晩年の詩境<sup>14</sup>

メルヴィルは小説よりも詩に携わった年月が上回り、しかも詩作は余技ではなく、1860年には出版社に原稿を送りつけるも詩集出版が叶わなかった経緯もあり、アメリカの長詩 *Clarel*（1876）を出版もした。概ね、寸暇を惜しむように読書と創作に励み、注目されなくても書き止めることができなかった。

晩年詩の研究に先鞭をつけたのは、作品再版も含め何といっても Douglas Robillard の功績である。そのロビラードが指摘するように晩年にメルヴィルが収集に励んでいた西洋美学との関連は重要な面であるが、晩年詩は他にも形而上的なものや奔放にエロスを謳い上げたもの等、多岐にわたる。本節では *BB* との関連を探るべく、バラと水夫時代の懐古が *BB* を紡ぐ太い糸であることを概観したい。昨今でこそ晩年詩も注目されるようになったとはいえ、*BB* と十分に関連させた研究には至っていない。

ビリー処刑で重視したバラとの関連を検討してゆくに当たって *WW* 所収のバラ詩群<sup>15</sup> に注目したい。こうした詩はバラが、美やキリスト教の象徴というに止まらず、薔薇十字の秘儀やバラ油という点で奥義でもあることを示している。例えば詩「薔薇十字の新たな友愛団員」(“The New Rosicrucians,” *WW*) では、苦難や悲しみに対しても十字架に絡みつくと＜薔薇の蔓＞となって、友愛団員よろしく克服しようとしている。

To us, disciples of the Order/Whose Rose-Vine twines the Cross,/Who  
have drained the rose's chalice/Never heeding gain or loss ;/For all the  
preacher's din/There is no mortal sin-/No, none to us but Malice.//Ex-  
empt from that, in blest recline We left life's billows toss ;/If sorrow come,  
anew we twine/The Rose-Vine round the Cross. (337)

薔薇十字による連帯である。晩年のメルヴィルは薔薇十字友愛団員のようになり、異教的なバラとキリスト教の十字架を調和させるに至った側面もある (Dilligham 145)。*BB* との関連ではメルヴィルは、ビリーを誹謗した Claggart が体現していた生来の＜悪意＞が世には在るという悲観的認識に徹しつつも、寛ぎあうことで事態に抗しようと唱えていると読める。周知のように薔薇十字は知と結びつき (Yates)、メルヴィルはそうした部分も *BB* 最終章での十字架

とバラッドに結実させているようだ。メルヴィルは以前からテンプレート騎士団に興味を抱いていたので<sup>16</sup>、詩「薔薇十字の新たな友愛団員」で薔薇十字の秘密結社に、気楽な独身者たちの楽園とは異なり苦悩への対処法を見ていることは分かりやすい。詩「バラ窓」(“Rose Window,” WW) で、天使がランプのようにバラを携えて歌い手の夢枕で死など恐ろしくないと伝えるのも、薔薇十字ならではの知恵の伝授とも見える。

先述の詩「バラ栽培農夫」では、バラ油は花自体よりも聖なるものとして提示される。隠居したペルシア人の歌い手は、バラが咲き誇る大農園を相続し、花を利益の多い切花として売るべきか、労多くして益少ないバラ油作りを選ぶべきか逡巡する。神聖だからこそバラ油作りも捨て難く悩むわけであり、精油の神秘は肯定している歌い手は、バラ油を “Yet this same Attar, I suppose,/ Long time will last, outlive indeed,/The rightful scepter of the rose/And coronation of the weed” (345) と絶賛するものの、“Rapture, and profit, health, enjoyment,/I am for roses—sink the Attar!” (348) と断じて、結局、生花を売る金儲けを選んでしまう。この歌い手は作者とはかけ離れた人物なので (Shurr 203)、歌い手が経済を優先させてバラ油作りを選ばなかったことが逆説的にバラ油の神聖さを際立たせていると読め、本詩で打算的な生花売りを選ばせたことは BB とは一線を画すであろう<sup>17</sup>。詩「バラ油の瓶」(“The Vial of Attar,” WW) もまた、バラ油は失った花のごとき人を想起させるだけだと嘆くのだから、バラ油の力を認めていることに変わりはない。

翻って見れば、本詩「バラ栽培農夫」は芸術論と読める。メルヴィルは、すぐに金になる生花ならぬ作品作りに精を出すのではなく美の粋を生む辛苦を痛感していたからこそ、真実探求者が芸術を生む厳しさを主題とした、“Art” をはじめとする “The Weaver”、“In a Garret”、“Lone Founts” といった T 所収の詩も書いたのであろう。かくも作者にとってバラは神秘や神性を肯定するものだと結論できる。

一方、晩年の幾篇かは、前近代的楽園と汎神論の賛美であり、その裏には失楽園をもたらした近代批判が色濃い<sup>18</sup>。例えば詩「群島」(“The Archipelago,” *T*)は、ポリネシアにギリシア神話のパンの神が司っていた楽園をだぶらせ、“T’s Polynesia reft of palms,/Seaward no valley breathes her balms—/Not such as musk thy rings of calms,/Marquesas!” (335) と南海の<異教>の海に浮かぶ正真正銘の<エデンの園>を謳っている。「羨ましき島々」(“The Envious Isles,” *JM*) や「ネッドへ」(“To Ned,” *JM*) も昔日の南海を懐しむ点、共通している。

わけても「羨ましき島々」は、白人が嵐に見舞われて辿り着いてみれば、そうした南海の島々の奥地では神々の宿る森羅万象が緑したたる親しみあい、島民は死の概念すら持っていないと歌っている。本詩の<幸福の島>について批評家諸氏は、眠りが領する無時間性に<生の中の死>しか見ず、無時間的な楽園への退行だと島民を批判しているが (Cohen 220-21, Stein 64, Dillingham 115-16)、この定説は間違っているよう。そうではなく、題目の“Envious”を虚心に受け止め、渚で幾多の島民が笑窪を浮かべてまどろむ無防備さに着目し、かつ、他の詩「群島」や「ネッドよ」における近代批判も勘案すればよい。そうすれば本詩は、白人が侵入してきて集団殺戮をすることを予見し、植民化前夜に目を据えて批判の矛先を白人に向けていて、歌い手は島民の<眠り>が覚まされないことを願っているのだと読む他ない。

詩「ネッドよ」は悪乗りをしているというまでに、歌い手にとっての古き良き船乗り時代の南海での快楽を肯定しており、ここに明らかなように、メルヴィルはポリネシアの死生観を肯定しているのである。後に文明化の大義名分の下に貨幣経済をもたらした白人は進歩を誇りにして現地人にたいして優越感を抱いているが、快楽においては負けているとか<sup>19</sup>、キリスト教徒として生真面目に聖地巡礼をするよりは、たとえ追憶で美化されたトボスにすぎなくとも、真の楽園に魂を向かわせるのだと宣言している。そして歌い手は、朋友のネッド

と自分は今時の若者には行けない秘境を味わったと多幸感を横溢させる。ポリネシアは *A Midsummer Night's Dream* 顔負けの不思議の国だったというからには、メルヴィルがかねてより敬服していたシェイクスピアを超えたという自負すら漂わせる豪語ぶりといえよう。挙句、死は必定なれど、北米先住民のゆったりした精神で煙草をくゆらせれば、“Marvelling mild if mortal twice,/Here and hereafter, touch a Paradise” (295) と、此岸と彼岸で楽園、つまり天国に二度行けるなどといった、おどけた詩行で結んでいる（“touch” は水夫言葉で「寄港」の意）。かくも晩年詩は、メルヴィルが懐疑を生涯抱えていたかの定説を覆すほどの勢いでエロスを謳い上げ、前近代を肯定し、楽園を破壊した近代を呪詛している。

ポリネシア死生観、ゆったりした北米先住民の暮らしぶりの擁護は、メルヴィルの宗教観がキリスト教を超えていたことを裏付けよう。晩年詩には、パン神の司る南海を賛美した先の「群島」もあれば、我を滅して涅槃の彼方へと願った「仏陀」（“Buddha,” *T*）、魂の東洋の小部屋に立て籠もり、キリスト教に癒されなかったものを北米先住民のパイプに救われる「聖なる煙草」（“Herba Santa,” *T*）もある。かくも多彩な興味、開かれた宗教観は、19世紀の白人作家には珍しかったといえよう。紙幅も尽きたが、メルヴィルは1884年に正式に教会員になったものの、オーソドックスなキリスト教に帰依したとは考え難いことを付言しておく。

### 結論—有終の美

本稿では『水夫ビリー・バッド（秘話）』におけるビリー救済と芸術的昇華を論じた。バラ油の神秘を捉えることによってビリー昇天にキリスト教に加え汎神論的救済を読み、さらに水夫仲間には公式報告が忘却されることと対照させてビリーを十字架や唄として残すことで、メルヴィルがビリー救済を図ったことを辿った。そして伝記と晩年詩に注目して、その近代批判、水夫の絆の回

顧、バラ栽培と薔薇十字を援用した。

メルヴィルは長年愛しんできた無垢なる〈蛮人〉を昇華すべく、たとえビリーの身体は軍にくれてやろうとも、せめて魂は救うべく、天にはバラによる離脱の雰囲気が残るよう救済し、現世には粗野な水夫達の敬慕による救済を用意したと考えた。ビリーが水夫の中で生き続けることに公式記録を無化する力を見せつけ、自分が老いてなお転覆精神を堅持している証とした。

とくに近代以降、人間は実在するのは物質だけであるとする唯物論的な考え方に傾きがちである。メルヴィルは、かつて『クラレル』で前景化した、ダーウィンの進化論に代表される科学に対立するものとしての信仰という積年の課題に、この遺作でようやく答えを出したといえようか。BB 推敲は、ビリーを切花のような一介の〈ハンサムセイラー〉に終わらせるのではなく永遠に香る美の真髄とせんがためであったろうし、また、無垢という点で卓越した人物が生を終える時になすべき礼節のためでもあったろう。その営為はまた、そうした前近代の残り香を求めて止まない老いた自らをも救わんがためでもあったかもしれない。

## 註

1. Johnson 111-33 が便利。
2. メルヴィルのテキストには引用文献に挙げたものを使用した。以下、いずれの作品も頁数のみ括弧内に記す。英語からの翻訳は全て著者による。
3. 後にタヒチではボマレ 2 世がロンドン伝道協会と結託して島民を集団改宗させたが (Liebersohn 241-45)、メルヴィルはビリーの改宗拒否を集団改宗直前で時を止めている。メルヴィルは *Typee* や *Moby-Dick* でも宣教を批判したし、*Omoo* に明らかのように西洋によってタヒチに死と腐敗がもたらされることを知悉していた (*Ibid.* 289-97)。
4. この戦艦付き牧師の振舞いは、聖書「ルカ伝」(Luke) 第 6 章 31 節にある、「してもらいたいと思うことを人にもしなさい」という「黄金律」に基づいていよう。

*Moby-Dick* の Ishmael と Queequeg の思いやりを想起させる。

5. バラのビリーについては他にも次のような個所である。“[T]hanks to his [i.e. Billy’s] seagoing, the lily was quite suppressed and the rose had some ado visibly to flush through the tan” (50), “[Billy’s new position] was something analogous to that of a rustic beauty transplanted from the providences” (50-51), “[I]t was which made the dimple in his dyed cheek, supplied his joints, and dancing in his yellow curls made him [i.e., Billy] pre-eminently the Handsome Sailor” (78) バラ油とメルヴィルの他作品については Finkelstein 239 参照。
6. 芳香性物質は神性と結びつくことが多いが、バラ油もアラブ世界や、後はヨーロッパの錬金術師の手によって発展した。錬金術におけるバラ蒸留過程は内なる精神的変遷と同様だとみなされていた（カーティス 13）。バラ油についてはローレンスも参照。
7. 折しも *BB* 執筆中の 1890 年 12 月には、Wounded Knee の虐殺が 3 世紀にわたる北米先住民とアメリカ人との戦いの終息を告げていた。
8. メルヴィルの晩年詩には、反ロマン的自然観を歌うもある。詩集 *JM* が表す自然界は概ね、人の苦しみに関心、あるいは加虐的である。「氷山」（“The Berg”）では、「アザラシたちは滑りやすそうな所で眠り/崖縁でまどろめど 高みから滑り落ちはせぬ/不注意ゆえに血迷って/船があたふた沈みし時ですら」（297）とあるように、巨大氷山やそこに憩うアザラシは、難破など意にも介さず超越的に無関心である。「アメリカカヨタカ」（“The Haglets”）は「海は腹が空いたからと船を狩る」（288）とし、さらに詩「玉石」（“Pebbles”）では、「我は無情の、かの無情の<海>なりき/静穏に微笑みしときこそ、非情の極み—幾多の難破を得て、鎮められるのではなく喜びいる」（299）と海は破滅を喜び、邪悪極まりない。詩「豎琴」（“The Aeolian Harp”）でも、ロマン的な表題に反して廃船がどこまでも漂う。星野 267-79 参照。
9. *BB* の基となった Somers 号叛乱の報告書が粉飾されたものであったことを持ち出すまでもなく、*Benito Cereno* を物したメルヴィルであってみれば、公式発表がいかようにも権力に改竄されることはとうに承知していた。奴隷反乱首謀者 Babo の声など盛り込まない裁判供述書に続く作品末尾では、広場に晒されたバボの生首の眼が、彼方の白人 Cereno をねめつけて殺すかのような描写である。作者は権力に封殺された者にせめてもの反逆の力を与えざるをえない性癖と見える。

10. *John Marr and Other Sailors* という表題も水夫を帯びている。
11. ヴィア艦長が、例えば *BB* が献げられたチェイスであれば、ビリーの即時処刑には及ばなかったろう。チェイス（実在人物名は John Chase）は、若きメルヴィルが乗り込んだ軍艦の上官で、西洋古典も諳んじれば、平水夫と冗談を飛ばしたり、職を投げ打って南米先住民の反乱に身を投じたりする面もあり、高級・低級文化兼備であった。この点もチェイスがメルヴィルにとって生涯、理想の男であった一因であろう。出会った当時 53 歳、生きていれば 1891 年に 101 歳。メルヴィルの *White Jacket* は登場人物でもあるチェイスに捧げられ、チェイスは詩 “Jack Roy” にも登場する。
12. スナッグハーバーについては Barry 94-98, Parker 651-55, 741, 744, そこへのメルヴィルの逃避的出入りについては Robertson-Lorant 519-522, 529, 568, Parker, 657 参照。
13. “‘My god!’ said the whiskerando [i.e. Melville], ‘I’ll say there were! I went back to the island a couple of years after I left there on boards a man-of-war and the first thing I saw when I went ashore was my own little son about a year and a half old running around naked in the sun on the beach.’” (qtd. in Robertson-Lorant 577-78, Parker 890)
14. メルヴィルの晩年詩には執筆時期を特定できないものも多く、散文との混交も稀にあるが、いずれも当時の作者の心を歌ったものであるため、本稿では上記 3 詩集の所収作品を晩年詩と称することにする。
15. メルヴィルのバラ詩には、先述のもの以外にも “A Ground Vine,” “The Avatar,” “The Accepted Time,” “Without Price,” “Grain by Grain,” “Heath-Roses,” “The New Rosicrucians,” “Under the Snow,” “Amoroso,” “The Devotion of the Flowers to Their Lady” がある。
16. メルヴィル中期の短編「独身男たちの楽園と乙女たちの地獄」野間 106, 118 参照、「二つの教会堂」で墮落以前のテンブル法学院にたとえていることを論じた廣川 92-105 も参照。
17. 有用性偏重の世間への反発は、作者晩年の諸作品、特に「ジョン・マー」や「リップ・ヴァン・ウインクルのライラック」 (“Rip Van Winkle’s Lilac,” *WW*) に顕著である。
18. 詩「シラ」 (“Syrá,” *T*) では、舞台こそ中世のエーゲ海シラ島ながら、重労働もな

く暮しそのものが余暇であったのに、金銭がもたらされたことにより陽気さが奪われた様を嘆く。

19. 本稿でも触れた詩「多島海」(“The Archipelago”)では、ポリネシアをギリシア神話のパンの神が司っていた楽園にだぶらせて、失楽園を謳っている。なお、メルヴィルには“Under the Rose”という死後出版の晩年の詩もある。詩「熱帯地方を渡って」や“After the Pleasure Party”ではバラは濃厚な性愛と関連する。“The Rose Farmer”では、バラの花が女性性器で、花に入る虫や蛇が男性性器だが、そうした悪戯めいた比喩も晩年詩、特にバラ詩に散見される (Robertson-Lorant 610)。溯れば花、特に薔薇のイメージリーはメルヴィルの第3作 *Mardi* にあり、その Serenia 島は花だけであるし、『クラレル』のカントー “The Cypriot” ではバラとワインが快樂主義と関連する。

### 引用文献

- Barry, Gerald J. *The Sailor's Snug Harbor: A History*. New York: Fordham UP, 2000.
- Cohen, Hennig. (Ed.) *Selected Poems of Herman Melville*. Carbondale, IL: Southern Illinois UP, 1964.
- Dillingham, William B. *Melville and His Circle: The Last Years*. Athens: Georgia UP, 1996.
- Finkelstein, Dorothee Metlitsky. *Melville's Orienda*. New Haven: Yale UP, 1961.
- Johnson, Claudia Durst. *Understanding Melville's Short Fiction: A Student Casebook to Issues, Sources, and Historical Documents*. Westport: Greenwood P, 2005.
- Liebersohn, Harry. *The Travelers' World: Europe to the Pacific*. Cambridge: Harvard UP, 2006.
- Melville, Herman. *Billy Budd, Sailor (An Inside Narrative)*. Chicago: Chicago UP, 1962.
- \_\_\_\_\_. *The Poems of Herman Melville*. Ed. Douglas Robillard. Kent, OH: Kent State UP, 2000.
- \_\_\_\_\_. *Poems: The Works of Herman Melville*. Vol. XVI, London: Constable and Company Ltd., 1924.
- Milder, Robert. “Old Man Melville: The Rose and the Cross.” Ed. Donald Yennella, *New Essays on “Billy Budd,”* Cambridge: Cambridge UP, 2002, 83–113.

- \_\_\_\_\_. *Exiled Royalties: Melville and the Life We Imagine*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Parker, Hershel. *Melville: The Making of the Poet*. Evanston, IL: Northwestern UP, 2008.
- Robertson-Lorant, Laurie. *Melville: A Biography*. New York: Clarkson Potter/ Publishers, 1996.
- Robillard, Douglas. *Melville and the Visual Arts: Ionian Form, Venetian Tint*. Kent, OH: Kent State UP, 1997.
- Shurr, William H. *The Mystery of Iniquity: Melville as Poet, 1857-1891*. Lexington: Kentucky UP, 1972.
- Stein, William Bysshe. *The Poetry of Melville's Late Years: Time, History, Myth, and Religion*. New York: State U of New York P, 1970.
- Teskey, Gordon. "The Bible in *Billy Budd*." Dan McCall Ed. *Melville's Short Novels*. New York: W.W. Norton & Company, 2002. 375-96.
- Yates, Frances A. *The Rosicrucian Enlightenment*. London: Routledge, 1972.
- カーティス、スーザン『エッセンシャルオイルブック』双葉社、1998年
- 杉浦銀策『メルヴィル—破滅への航海者』冬樹社、1981年
- 野間正二『読みの快樂—メルヴィルの全短編を読む』国書刊行会、1999年
- 廣川紀子『メルヴィルの中短編小説—合わせ鏡の世界』開文社、1999年
- 星野勝利『ハーマン・メルヴィル—奈落と星と』リーベル出版、1991年
- ローレス、ジュリア『バラ油』フラグランソジャーナル社、1997年